

買い物客でにぎわったあの頃

前橋の商業の中心地



「中心市街地」まちなかは、戦後間もなく活気を取り戻しにぎわいを見せていた場所でした。今も続く前橋まつりは、戦後の復興祭として当初からまちなかを中心に開催されてきました。そして高度経済成長期を迎えるとまちなかはさらに活発化。前三百貨店やスズラン、西友などの大型店舗が次々と開店し、商業の中心地として、多くの人々が買い物を楽しむ場になっていきました。



Interview

まちなかは当時の最先端

昭和50年のオープンと同時に西友(後の前橋西武)で働き始めました。後にオープンしたWALK館は若者向けのショップが売りで、10代20代から圧倒的な支持がありました。まちなかにも話題性のある店が多く、周辺に高校があったこともあり、大変にぎわっていました。馬場川通りにタレントショップがあり、百貨店には県内初のお店が入り、当時の最先端を行く場所だったのでないでしょうか。その後、バブル崩壊や郊外型店舗の増加で衰退が進んでしまいました。まちなかは私を含め、たくさんの方が楽しんだ場所だと思います。昔のように、自然と人が向かうような場所になっただけだと思います。



西友LIVIN前橋店 元婦人服課長 井上 厚さん



戦前の前橋名物の一つだった立川町のすずらん灯。戦中には中止しましたが、昭和22年に戦後初の街灯として復活。写真は弁天通り。銀座通りなどにも設置されました。



昭和37年、中央通りにあった店舗「赤かんぱん」に前橋で初めてエスカレーターが設置されました。上り一本でしたが、エスカレーター目当てに連日多くの人でにぎわいました。



昭和39年、現在の前橋テルサの場所に県下初の百貨店として前三百貨店が開店。完成した当時は県内一の高層ビルでした。最上階には天望レストランがありました。



昭和37年に、県下初の全蓋アーケードである中央通りアーケードが完成。車の通行を禁止して買い物客の安全を優先した商店街の形は、全国でも先駆的な存在でした。

弁天通りのアーケードは昭和43年に完成。これを機に約半数の店舗が新築し、大型百貨店に対抗した歩行者のための新しい商店街「横のデパート」が誕生しました。



前橋商工会議所 創立百周年記念誌「夢 出会い 前橋」より

時代で変わる商業の中心地

しかし、時代とともにまちなかを訪れる人は減少。高校の郊外移転も拍車をかけました。それに伴い、多くの店舗が閉店。郊外への大型店舗の出店や通信販売の定着などが影響していると考えられています。



2年前に実施した市民アンケートでは、回答者約3,000人のうち、まちなかににぎわいを感じない人の割合は約9割。身近なところで用が足りることや買い物をする店舗が少ないことなどを理由に、ほとんど行かないという人が多い結果でした。その一方でまちなかに活気があることは重要と答えた人も約8割いました。多くの人がにぎわいを望んでいるのです。時代とともに変わる商業の中心地。衰退が進んだまちなかに再びにぎわいを取り戻す、新たな挑戦が始まります。